

賃貸物語(5)

三世代―ウサギ愛しや

小野 友貴枝

(1)

ウサギを室内で飼う人がいるとは、知らなかった。賃貸契約書をよく見た。確かに一番下の段に「兎一羽」と書いてある。

母屋から東側に位置するところに、未知子の名義の一戸建て貸家四棟、E・W・S・N棟がある。未知子は、故あって、義母(姑)から相続した土地を持っていた。相続するときには高い買い物になったが、未知子は、農家生まれのせい、土地が好きだ。しかし土地持ちになると、その固定資産税にはびつくりする。

土地は国から買ったかのように、高額な税金が課せられる。土地を遊ばせておいたのでは、そのうち課税貧乏になってしまう、と考へ、彼女は、税金対策のため、貸家四棟を造ることにした。それも可能な限り銀行から借りるといふ経営感覚を働かせた。その上、賃貸と言つてもいい家を建てれば、ハイクラスの人に貸し出せる、そんな構想を持った。

もちろん、賃貸住宅と言つても一戸一戸丁寧に造つた家だから、肩書のある人を狙つて、環境も整えたことが注目を集めた。入居者は、都会から転入してくる六十歳代。バリアフリーの間取りは、夫婦連れには最適だった。その上に、室内犬を飼うことも視野に入れて設計しているから入居した人に喜ばれ、空く間もなく、入居希望者は続いている。また、環境と、交通の便の良さとが利用者にフィットしたともいえる。

先月、四月に退去して、三か月も空かないうちに入居者が見つかったという知らせに、未知子は、ほっとした。その人は、六十代の夫婦、小田急沿線の町村から、異動するという方で珍しい。大体同列の市町村から、移動してくることは少ない、何らかインパクトのある理由がなければ、環境が似ているようなところに住まない。

六十五歳過ぎた夫婦が隣の町から引越してくるといふことは、かなりの理由がなければ生活圏を移動しないだろう、少なくとも家が古くなつたとか、事業に失敗したとか、それなりの理由があるだろうと未知子は踏んでいた、しかし兎一羽には驚く。何のためにウサギと一緒に住むのだろう、ベランダに板箱を置いて、

そこで飼うのかと思っていた。律義に外で飼うウサギの許可を取る人もいるのだと、不動産屋を信じて、書類に印鑑を押しそうになったが、ちよつと待て、確認してから、と資料をテーブルに戻した。

「これ、兎と書いてありますが、犬とか猫の字ではないのでしょうか」と思わず未知子は、いつも世話してくれる、事務の女性に尋ねた。特約事項に「兎」一羽って何だろう、特約事項にかかれた兎という、文字に見入っていた。

「私の方でも、お聞きしてからと思っていました。ウサギを飼いたいのですって。いかがでしょうか」なじみの女性店員が、声を落として質問された。

と、言われても、その意味が解せない。田舎の土地柄、外で飼うウサギまで相談してくるとは、と未知子も自分の常識範囲で受話器を耳に当てていた。

「あの耳の長い、白いウサギ、ですよね」

「いや、全身グレイで、茶が少し混じる。首の周りは白い毛がふさふさ、きれい。写真で見ると茶色の耳は太く立っている。ぬいぐるみのクマさんみたいで、びつくりします。入居希望の唐沢さんは、ウサギが入居できないければ、他を当たりますと、いうのです。でも勿体ないので、大家さんに訊いてみますから、と待つ

てもらっています」

「そんなに大切な猫、いやウサギですか、室内で飼うものなのでしょうか」

「室内で飼うのだと言っていました。唐沢さんは、ここではじめて飼うのですから、きちんと大家さんの許可を取りたいのですって。都会では、特にマンションでは特約事項と書かなくても、普通に飼えるらしいです。今までいた自宅では家族がいるから駄目だが、借家住まいなら飼えるのではないかと期待しています。昔から、唐沢さんは、大河町で、三世代で住んでいたようですが、どうも若い夫婦と仲が悪く、事業家である夫が、自分たちが出ることで、三方丸くなると、決められたようです」

話が長い。折って聞けば、ウサギと一緒に新しい生活を始めたいということだ。室内飼いのウサギがどんな動きをするか、分からないが、周りに迷惑をかけなければ、いいかもしれないと、未知子は判断した。

「そうですか、借家住まいをしたことがない人、六十歳過ぎてからは忍びませぬね。勉強してみます。この貸家では、猫を飼うことは禁止していますが、ウサギを飼うことは考えていませんでした。でも周りに迷惑を掛けなければいいとしましょう」

という返事をした。すでに未知子の中にもそのウサギを見てみたいという欲求が湧いていた。

未知子は、職場に、獣医師の仲間がいるので、室内ウサギのことを訊いてみた。

「ウサギと言っても国産のウサギじゃないよ。代表的なウサギは『ネザーランドドワーフ』と言ってオランダの小人という、二〇世紀初頭にオランダで品種改良されて生まれたと言われている。人懐っこくて可愛い。無臭で食べ物もインスタントのもので間に合うし、鳴き声も立てないから、隣人とのトラブルもない。マンション生活には飼いやすいので日本では急に増えている。今は、どこの動物ショップでも売っているよ。最近、マンションで流行ってきて、貸家ではまだだが、多くなった。値段も手ごろで、十、二十万円から飼えるよ」という言葉を聞いて、それなら、貸家で、飼うことは、もつと広がるかもしれない。ウサギを許可すること、かなり賃貸住宅の利用者も増えてくるだろう、と見込んで、この案件を承認することに決めた。

未知子は、契約書に捺印を押して、不動産に書類を戻した。

世間一般の常識として、農業地帯の賃貸は、農地に造る人が多く、整地もされない、余っている土地に造

るといふ地主は多い。未知子は賃貸住宅でも、個人の生活を大切にして垣根を造り、一戸一戸の生活を大切にしてきた。住居というものは、入居者の命を守るもので、安全で、強固で、災害から守られなければならない、寒さ暑さまで防げるものでありたいと願っている。何分にも入居者の生活の個人主義と快適さをもとめられている、家族と離れてさびしければ動物と一緒に住みたくなるはずだ、それを維持できるような環境づくりを応援しなければならぬだろう。昔のように安不普、衣食が足りればよいという人は少なくなつたはずだ。友達も呼べる、楽器も鳴らせるような生活を求めてくるはずだ。それに叶うような住居でありたいと考えている。

唐沢夫婦は、隣り町の人で夫が公務員をしていたと聞けば、長期に入ってくれるのではないか、どんな事情があるか知らないが、ぜひ入居してほしいと思った。ウサギの件は、不動産屋が調べてくれるであろう、案外、猫とは違って室内で飼うには、適しているかもしれない

唐沢夫婦は七月一日引越してきた。入居者は二人、夫婦ともに六十七歳。契約者は、元市役所の職員、退

職して行政書士の事務所を営む。今回の賃貸住宅は、事業者との契約になる。



S棟は、一番南側に建っているので日当たりがいい。目の前を用水路が流れている。幅は三メートルほどだが、深い川で、普段は二十センチもない流れだ。ただ、川上に大きな小田急が開発した住宅街がある。小さな川がその開設によって増量されて流れが速くなっている。住宅地にある暗渠は大雨になると雨量が高くなる。雨の時だけは要注意だが、川をまたいだ対岸は、東名

からのバイパスが通っている。

唐沢夫婦はこの川岸に、俄かごしらえのテラスを付けた。そこで食事もできるし、ウサギの運動にもなる。もちろん天気が良ければ布団を干せる。南側で遮るものがなく日当たりがいい。板張りのベランダで、大きなポーチに花だけでなく野菜もつくれる。春には、ゴーヤを植えてグリーンカーテンを造る。妻・瑤子の特技がいくらでも生かせる、ポーチを置いて、何でもかんでもお日様に干すという太陽崇拜、農業者特有の信者であった。

(2)

瑤子は、決して農作物と付き合ってきた生活者ではない、かえってやらなくて済むならやりたくない。しかし、夫がやりたがっているのを見れば無視するわけにはいかない、夫の助けを受けながら、だんだん白菜や大根、茄子までやるようになった。かえって、野菜を作る時間を多くなり、その代わり、民謡や歩け歩けクラブの回数を少なくした。その方が、長男夫婦との軋轢が少ないと思えるようになった。

瑤子は、町中にある幼稚園で働いていた。六十五歳、定年になって、退職した。退職した時の条件は、決し

て専業主婦、家庭人にはならず経験を活かし、児童民生委員という、地域で肩書を持つてボランティアに専念した。もちろん彼女は生活科という資格の取れる産業能率大学を出ている。だから、専業主婦というくりの生活は苦手であったし、仕事のない生活はしたくない、と思っていた。

ある夜、夫の圭一が帰ってきて、「かな葉奈さんは、どうしたのだ」と夫が心配して大きな声で訊く。長男の妻、葉奈の車がないことに気づいたようだ。

「昔働いていた、隣の市にある生命保険会社に再雇用で就職しました、知らなかったですか、私が辞めてすぐに働きだしましたよ」

「なら、俺に話があつてもいいじゃないか」
圭一は、驚き半分、感情的になっていた。

瑠子は、葉奈を代弁するように、「私が退職すると同時に、働きだしました、家はお母さんに任せますと言つて。お母さんだつて、今まで働いていたのだから、ここで交代してもいいでしょう、と思つたようです」

さらに、「自分たちの洗濯ものは、前の晩に干しますから、結構です。お母さんたちのものは自分でしてくださいと、葉奈が言つた」という。

「今まで何もかも一緒にしていたのに、何ということか。これでは一軒の家で、すべて二分割したようだ。こんなことが話し合いもしないでよく出来るものだ」

夫・圭一は大きなダメージを受けたようだ。

もともと葉奈が嫁に來た時から、二階は、長男夫婦が棲み、可能な限り没交渉にしてあるが、風呂と食事は一階に広いスペースにとつてあり、家族が増えても十分間に合うようにできている。

それなりに、若夫婦の生活は脅かさないよう、瑠子は二階にも上がらないようにしている。本当は二階の外枠に、屋根付きのベランダがあるので雨模様時には、そこに洗濯物を干したいが、実際は、葉奈に気兼ねして、上がつていかない。二階には三つの部屋があるが、孫たちが中学生になれば、いや小学生でも一人の部屋が欲しいはずだ。一階を使つてもいいと言つてはいるが、食事を別にしてから一階には誰も降りて来なくなつた。

玄関から通じる廊下、その途中に階段がある。子供たちは学校から帰ると、一階の部屋を覗きもしないで二階が上がつてしまう。「おばあちゃんただいま」とも言わない。

瑠子は寂しいものだと思うようになった。食事を夫

婦だけでするようになってから、二階の音が気になる。

二階は、賑やかで、テレビの音や、いろんなものがぶつかる、がたがたと響く音ばかりだ。

一階には孫たちだけでなく息子の俊介も、自由に入りしてテレビも見えていたが、最近では降りてこない。

風呂場にあった洗濯機も使わなくなって、二階のベランダに新しい洗濯機を備えたという、いつの間、と瑠子は、葉奈の相談してこない性格にいらだつことが多くなった。

洗濯物が一緒の時には、何となく共同生活という感じがしたが、今はその感じが無い。これからは、夜に洗って、全部、二階のベランダで干してしまう、すべ下下に降りなくて済む方法を考えたようだ。もちろん子供の弁当も、下のキッチンを使わずに、全部二階で済ませる、なんとという割り切り方か。勤めに出ることで、一階の姑の世話にはなりたくないし、苦情も言われたくないという強気の姿勢だ。一軒の家の中に、主婦二人いないという、今はやりの生活様式を貫ぬこうとしている。

瑠子は、長年、幼稚園で働いてきたから、そこを無罪放免になっても、まだまだ、幼児保育ボランティアの仕事はある。決して暇になつたわけではないから、

その方が助かるが、葉奈が計画的に仕事を捜していたとは驚きだ。日中だけとはいっても、かなり重労働だろう、負けず嫌いな葉奈は、瑠子に小学生の子供の面倒を頼むわけでもなく、サッササッサと自分で解決してしまう。瑠子の祖母としての役割、家に入って孫の面倒を見たいと思った望みは、雲間に消えてしまった。「おばあちゃんには家にいて、好きな農作業をしてください、私は、これから外で働きます。お独りでどうぞ」という、セリフが聞こえそう。一軒の家の中で、二人の主婦はいらぬという信念を買かれてしまった。

こんなに策略家だとは、思ってもみなかった。同居を嫌がらずに嫁が来てくれたと思って、「いい嫁だ」と喜んでいたのに、この急展開には恐れ入った。一つ一つ、合わさっていた生活が剥がされてくる。あと残っているのは玄関と風呂だけだ。新聞さえ、別々に取るようになった。「二階」唐沢俊介・葉奈・邦明・寛・有希」という五名の名前の入ったポストまで下がっている。

「お母さん、郵便物を分類しなくて、楽になったでしょう、子供たちの郵便が多くなったから別にしました」と葉奈が説明してくれた。

「このぐらい、なんでもないですよ」と返事しそうに

なつたとき、友達に聞いた言葉を思い出した。それは、嫁あてに來た手紙を見られるのが嫌なのだということが本心だったという。それなら、ポストを覗かないでください。私の方で分類しますから、と言われた方がましだった。姑に詮索されているような気持になると聞き、そういうものかと、改めて思った。

これでは、二階に他人を入れているみたいだと、瑤子は落ち込んだ。

「ポストまで別にするとは思っていなかった、この家を継いでくれる、大事な長男夫婦。若い時から、一緒に生活になじもうと、思ったのに、一気に別居スタイルになった。

「そうかといって、長男は、町の教職員、給料は安い、家を建てる訳にもいかないだろう、同居がベターだと思っていたが、急に、私が家に入ったとたん、体制が変わった」という思いが、瑤子の頭に去來する。

そういえば、「おばあちゃん」という言葉も聞かなくなつた、おばあちゃんなんか、ただのおばあちゃんです、話ができる人だと思われなくなつたのか、昔のように家族として扱われなくなつた。

「つまんないねー、おばあちゃんの役割が何にもなくなつた。孫から見ても。ただの小言をいう年寄、いや

誕生日に、無条件で小遣いくれるおばあちゃんに、成り下がってしまった。孫に教えたことがいっぱいあったが、嫁に阻まれて、二階の階段の降り方一つ教えられなくなつてしまった。おばあちゃんが同居している意味がない」と思えて來た。

「一階を孫たちに使わせれば、もつと孫たちにもゆとりができるかもね。一階も使いたいという不満が出てきたのかもしれない」と、瑤子は愚痴をこぼすようになった。

圭一は、妻の愚痴が嫌になつたのか、それとも一階と二階を区別している生活が嫌になつたのか、ある日、「孫のために俺たちが出ればいいじゃないか」と言い出した。

「俊介には、家を建てるゆとりはない、三人の子供を教育するだけでやっただ。孫も、一人一人の部屋が欲しくなるだろう、家族のいるところで勉強させるわけにはいかない、このままでは進学まで、邪魔するようになる。子供たちが育つてから、俺たちは戻ればいい、それまで、俊介たちの生活を見守ろうじゃないか、幸いに、俺の事業所として住居を借りれば、必要経費で落とせるから、一挙両得だ」

その夜、瑤子は、俊介と葉奈を呼んで、話合うことを決意した。玄關脇の洋間に四人が椅子に座った。

俊介は、父親に言われることを承知しているのか、「お父さん、子どもの教育費が掛かるんです。僕の給料では間に合いません。それだけでなく出来たら、本心はこの家から出たいというのは葉奈の希望です。お母さんが勤めている時には日中一人だったから、家の中が自由に出来ましたが、お母さんと二人になれば、窮屈です。そんな家どこにもありませんよ。それだけでなく、子どもも来年には高校生です。とにかく、働かなければ子供の塾にも入れられません。お母さんが家に入って丁度いいチャンスです。葉奈は働きたいのです。前の職場で、再雇用で採ってくれたいのですから、職場が近いし、いい条件だと思います」「そのぐらいの教育費、俺が出す」と圭一が言った。「何言ってるのですか。お父さんは、仕事を終えて第二の事業を始めてしまつて、設立の経費が必要でしょう」「大丈夫だ、今は、収入が少ないが、必ずお客がつく。みんな公文書を作るのに困っているのだから」「でも、これからでしょう、いまは、葉奈を働かせなければ、やっていけません。職場は家の近くだから、大丈夫です。遅くとも七時には帰ってきますから」

「子供たちの食事、夫の食事も私が帰ってきてから作ります。お母さんには、迷惑を掛けません、気にしないでください」葉奈も強気だ。

「そもいけません、私が食べさせます」瑤子ははっきり言った。祖母である自分を頼らない葉奈に腹が立っていた。中学生になっている孫たちのご飯も作らせてもらえないのか。何のために同居しているのか、情けない。今まで、家を任せていた嫁に疎遠にされているような気がする。彼女は、同居した時から、自分たちの食事は別、と宣言していたことを改めて思った。だから、瑤子がどんなに遅く帰ってきてきても、彼女は、義父の食事を並べることとはしなかった。一階と二階の別居という関係、家が大きいからできたというのに。そのうち外玄關を作つて、一階から、二階に上がらなくても済むようにしたいというに決まっている。同居ではなく、二世帯暮らし、たまたま風呂が同じであることを、大きな欠陥として見ているのかもしれない。今でさえ、瑤子の先に子供たちは入れてしまいたそうだった。そして自分たちは、瑤子たちの、「お先に」という言葉を聞かない限り入りに来ない。そのうち二階にも風呂を造りたいというに決まっている。風呂と玄關を共有していることが、彼女の不満であった、だか

ら家にいるときにはその敷居も高く感じ、すべて一階を通過しない生活をしたがるだろう、同居を経済的にとらえ、三世代の生活を精神的に拒否しているのだろう。

確かに、最近では、周りを見ても、若夫婦と同居したとしてもキッチンが別。食事は、年代の好みが違うから、はっきり分けて考ええるということが普通になつてしまつた。

「顔を合わせて一緒に食べましょう」という人はいないと聞く。この家もその通りだつた。それでも孫たちは一階でも遊びたいだろう、二階だけというのは無理だつたのだ。瑤子は家に入れば、孫の食事は作るつもりでいた。しかし、その思いは、簡単にノックダウンされた。祖父母になつてみなければ、孫のかわいさは分らないだろう、子供よりも、もっと深い情愛がある。子供よりもっと距離が短い。これは祖父母になつて、目の前で育つ存在を日夜見ている人でなければ分らない。本当に同居してみなければわからない現象である。自分の生命力を引き延ばしてもらつて、ような存在だ。しかし、それは、祖父母側の気持ちで、孫側からすれば、その濃い情愛が邪魔に思えることが多い。その情愛は鬱陶しいと言える。孫側から見れば、祖父母の情愛は、両親よりも数段低い位置にある。

こんな地方の農業世帯の多い土地柄でも、三世代は皆無に等しい。同居はしてゐたとしても内実は家内別居である。

「誰が、夫の両親と食事しますか」と言われそうだが、若い世代から、分裂してきた家内事情が、かろうじて踏みとどまつているのは、玄関と風呂場だけである。洗濯機は、数年前から、別になつてゐると、電気屋さんから聞いていた。経済性だけで踏みとどまつている風呂も、ちよつとの間に改装して、二階に造られてしまふだろう、外階段は少しの経費でできるはずだから、この問題は案外早期に解決するだろう。両親は、孫の足音を聞きながら、学校から、塾から帰つてきたと判断して、用事があれば階段の下から呼ぶという人が多くなつた、お小遣いの手渡しもなくなつたと聞いている。

瑤子の孫たちは、小学生まで、彼女が見ていたので、「おばあちゃん行つてきます」「ただいま」と言つてくれるので、まだコミュニケーションはある。ときどき、息子の声を聴かなくなつた、というときには、庭先の車庫のところで、嫁に訊くことにする。

「今週は、出張なの、きつと四国に行つています」という返事をもろう。俊介は、教育委員会の生涯学習課

に勤めているので出張が多い。

「お土産買ってくるかな、徳島の饅頭が食べたいな」

「俊介さん、おみやげ買うのが嫌いでしょう、何にも買ってきませんよ」すげない返事をもらってしまふ。

今は母親よりも妻の方が、強い、跡取り息子を牛耳っているのだからしょうがない。

まったく独りで家にいるのもつまらない。瑤子は庭続きの畑で野菜作りに精を出すようになったが、でも作ったものを食べてくれる家族がない。夫は、駅の傍の空き家に店を構えてしまった。行政書士などの事務所は、三坪もあればいいだろうと思っていたが、あんに相違して、印刷機や書庫、応接セットなどを入れて結局一階のフロアを全部借りた。そこで生活するので、瑤子は終日、一人で生活することになった。一日中、一人で生活する寂しさは、仕事をしていただけにかなりきつい。さて、どうしたものかと、泣けるような寂しさの中で考えたのが、室内で動物を飼うことだ。外仕事の多い瑤子を選ぶのは、犬である。犬は、どんな種類、室内犬ならマルチーズがいいかと思つているときに、マルチーズを飼っている人、小島直子を思い出した。

ある日、彼女の家を尋ねてみようと急に思い付いて、出かけた。

どうぞと言われて彼女の家が上がった。洋間に犬がいた。この部屋で一日、家族が留守の時も、遊んだり、眠ったりする、犬用の部屋だという。犬は外には出さないが、朝夕だけ、野放しにすれば満足する。板の間の真ん中に厚いカーペットを敷いてある、ここで日中、家族が留守の時には眠っているという。外に出せば、走り回るが家の中では、この部屋限定とすれば、おとなしい。新聞が数枚散らかっているが、時々新聞に潜る習癖があるので、置いてあるという。あとの遊び物は、棒があればいいと言った。

外に出なければ静かにして居られる、ウサギはもうと楽だという、家族が留守でも静かにじっとしていられるから、とコメントしてくれた。

瑤子は、室内で飼うウサギってどんなものか考えようとしたが全然わからない。でもこの寂しさを紛らしてくるものがあると聞いただけでも訪問した意味がありそうだ。

孫が三人いても、「おばあちゃん」と言ってくれない生活は耐え難かったが、これで良しとしようと思つた。夕方、夫が帰つてとき、「今日は、風呂は後番だから」

と言った。

「でも、空いているのだろう」と訊くので、さつき子供たちが、入り終わって、空いていますね」と、素っ気なく言った。

「なんだよ、その言い方は」と不機嫌そうに言う。

「いや、私も入ろうかなと、思っているのですが、どうしようかと思つて。じゃ、一緒に入ろうか」と、冗談半分言つてみた。

「そうだな、一緒もいいかもな」と本気で言う、久しく夫婦で風呂に入ったことなどない。

「また、冗談ですよ、入れるわけがないでしょう、二階から、いつ降りてくるかわかりませんよ」

「なんだ、つまらない。風呂もダメか。家に帰つてくる意味がないな」

「家に帰ってくるのは、風呂だけですか」瑤子は、まぜつかえしをしないタイプなのに、変に絡んでしまつた。日中、友だちの家を見てきたから、その話もした鬱陶しくなつていた。二階を気にする生活が寸詰まりなつていた。一階、二階で分かれた生活というのは、どっちが物音に気を遣うのだろうか。一階か、二階かと考えてしまった。孫が小さいうちは良かったが、大

きくなって、パイプ役だった、次男の寛でさえ、一階の祖父の元に来なくなつた。

これでは同じ家に住む意味がなくなつた。息子夫婦は、階下の静けさを気にし、二階は、二階で、物音を立てないように気を遣つていふという。なんというところか、お互いに気を遣つて、生活していたのでは、家族とは言えないと考えるようになった。同じ家に住むことの意味がなくなつて、かえつて無関心がつらくなる。

風呂から上がつて、ビールを飲みだした夫に、今日見てきた犬のことを話題にしようと、夫の機嫌の様子を見ていた。

「相談なんだけど、この家の子供に明け渡さないか」夫が突然言い出した。

「どうしてですか。私たちはどこに行くのですか」

「うん、それだが、いい貸家があるのだ。ちよつと高いが、夫婦だけで済むには三部屋もある間取りで、最近空いた、という情報が入つた」

「どこから、そんなことを」瑤子はご飯を噛むのも忘れて、夫の次の言葉を待った。

「俺が借りている、不動産屋から聞いた。いい家で、築七年で、ここで家賃を下げるらしい」

「いくらですか。家賃と事務所費の両方払うことができるのですか」

圭一は、とんかつが好きだ。熱々のとんかつを出すと、ご飯もお代わりする。彼は小さい時にはあまり肉を食べさせてもらってないので、肉の料理でご機嫌取れる、御しやすい人である。

「事業主が賃貸住宅に入っている場合は必要経費で、落とせる。俺の事務所も、ここで三年順調にいつている。事務員を雇いたいぐらいだ」

「優しい事務員を、いかがですか、」

「優しくなくてもいい、気が付く人を雇いたい」

「どうぞ、一緒にお弁当を、食べてください。どうせ、私は一人で食べますから」

「なんだ、珍しく、やきもちか、やきもちやくほど、亭主持てもせず、というから。どうぞ、どうぞ。それはそれだが一戸建ての小さい家いいだろうな」

「私は、もう小さい家いいですね。掃除のしやすい家を探してください。それでこの家から近いところ、野菜づくりは、私の楽しみ、通えるところに」

「じゃ、家を見に行くか、知らないところで、独り寂しかったら、犬でも、猫でも飼っていいから、いや猫は禁止と言っていたな、なんか、大家さんが、猫を飼

った人を入れて、とことん家を爪でかじられたという苦い経験をしているから、犬だけかもしれない。可愛いテリアでも飼ったら、どうかな。瑤子は動物も好きだから」

「いいえ、犬ではありません、ウサギがいいと、勧められました。私はウサギを飼いたい」

「ウサギとはな、オーナーが許可するかな」

「私も、初めてなのですが、ウサギは飼いやすいんですって、最近マンションで、流行っている。子供にも、女性にも喜ばれている、というの」

「初めて聞くが、お前が飼いたいなら、かまわない、その家は、犬はオーケーで、動物を飼うことを前提に家賃が設定してある」

「そんな、便利な貸家があるのですか」

「今の貸家産業は室内で飼う動物を禁止したのでは、購買力が低くなる、もつともつと、人と一緒に住む時代のになると見込んでいるらしい。何分にも独り暮らしの老人や、独り暮らしのサラリーマン、学生が増えてくるから、欧米並みになって、個人主義になったのだろうな」

「犬は吠えるから、ウサギは吠えないからいいかもー」と、夫は独り言を言った。

ある朝、瑤子がいつも散歩する通りを歩いてみると、中年の女性に声を掛けられた。

「スーパー丹沢へ行く道はここでもいいのでしょうか」

と重そうなりユツクを背にした女性は、急いているのか、足を止めずに聞く。

「この信号を渡っていくと左側に入口が見えます、その大きな建物がそうです。私も今そちらに歩いていまして、ご一緒しましょう」

「駅から歩いていけます、と言われてきましたが、かなり遠いですね」 五十代の女性は、歩くのが早い。

「確かに、近道はあるのですが、バス道でいらっしやれば遠いですよ」

「そうでしょう、二十分も歩いていますが、仕事は九時からだから大丈夫なのですが、ちよつと遠い」

「なんか、特産会でも」

「私は、駅弁の売り子です」

「どこですか」

「金沢地方の駅弁です。今、コロナで持ち帰りの食事が売れるのです」

「いいことを聞きました、じゃ、店内までご案内します。お勤めもその方ですか」

彼女の足運びもいいので、つい職場のことまで聞きたくなった。

「いいえ、臨時です。今、どこの名店の弁当でも売れるのです。外食が多くて」

「そうですね、私も小田原まで行って、湘南地方の幕の内弁当を買ってきます。おいしいですよ、コンビニで買うよりはずつと」

「ありがとうございます、東北線や北陸線の弁当が売れますよ、昔食べたと言って高齢者が買ってくれます。まあ弁当の種類をよく知っているので、驚きます」

並んで、歩いていると、女性の腕の辺から、樟脳の匂いがする、あれつと思つたときには、瑤子は質問していた。

「犬を飼っているんですか、抱いた臭いがしますけど」

「あ、そうですね、臭いますか。散歩して洋服を取り換えないで来てしまった。もちろん売り子になるときは、このような服は脱ぎますし、厚地のエプロンを着ますので」

「そうですね、この臭いは消毒剤の匂いですから、大丈夫ですが、何を飼っているのですか」

「ウサギです、マンションでも飼える、ネザーランドドワーフという種類です。可愛いのです」

「ウサギが、マンションですか」

「今結構飼っている人多いですよ。飼いやすくって可愛い」

「私は耳の長いウサギしか知りませんが、ウサギをね」

「マンションは猫や犬は禁止なんです。鳴き声でするでしょう、だからほかの部屋にも迷惑をかけますし」

「ウサギは鳴かない、ですか」

「その上、人になじみますよ。抱いていると可愛い、離れられなくなる。私なんか子供も孫もいませんので、ウサギを孫のように抱きしめて眠るのです」

「いいことを聞きました。私も今、なんか動物が欲しくてしょうがないのです」

「ウサギは、ちよつとした都会の小動物ショップで見られますし、サンプルを見て注文もできますからどうぞ」

「いいお話です。ありがとうございます」

「どうぞ、ここまでくれば分かります。お世話様になりました」

「私の方こそ、欲していた情報を、なんか神様のお告げのようで、うれしい朝になりました。じゃここで、さようなら」

なんとラッキーな朝だろう、これこそ今求めている、

瑠子の欲していた情報である。

瑠子はこの朝の朝の会話で得られた、室内ウサギ、ネザーランドドワーフの縁に会って、一週間後には、小動物店で、紹介され、オスのウサギを手に入れることができた。

老後、子どもに、「母屋ヲ明ケ渡スナ」という指南書めいた言葉を友人から聞いてはいるが、もう、孫たちも大きい、彼らがのびのび育つためには、一軒の家で、気兼ねなく住まわせるしかない、そのためには、夫が望むとおり、この家を明け渡すことが賢明だろう、このままでは、孫たちの大学進学まで影響する。息子だけの収入だけでは、私立大学までの余裕はないに決まっている。もう限界だろう、自分たちが離れることで、彼らの家族はのびのび生活するであろう。将来、高齢になって介護が必要な時には「面倒見ますと言っている」その言葉を信じて、いったん家を離れる、借家住まいも、いいことだろう。今の生活は限界だ。

「いいじゃないか、俺の事業費で、家賃は落ちる、必要経費だ」と夫は、決めかねていた瑠子を励ますように言った。

「一日、なんでも好きなように生活しなさい、そんな

生活がしたかったのだろう」

「そう、もちろん、話し掛けられるような、動物と一緒に生活したかった」

「丁度良かったじゃないか、お前もウサギ年で、相棒ができたようなものだ」

「確かに私は、ウサギ年生まれ」

夫がいい言葉を見つけて、瑠子を激励した。

「ウサギは鳴かない、臭くない」と言った動物ショップの店員の言葉を思い出した。

「ウサギを飼えばいいのだ、ウサギ年生まれの人がウサギを飼う、話し相手になれるかもしれない。これは妙案だ、そうすれば寂しさも救われる。いいウサギを見つければ」と瑠子は自分に拍車をかけた。

さっそく、ウサギを売っていそうな小動物店に行った。

「店には置いてありませんが、お取り寄せは出来ます」と言つて、ウサギの品種は、「ネザーランドドワーフです」と、グリーンのエプロンをかけた女性の若い獣医が再確認した。

飼い方の説明書付きで、次回は、一時間ほどレクチャーをしますからと、その予定日まで、瑠子の都合に合わせてくれた。

瑠子はいいい買物ができそうと、スキップしそうになる気持ちを抑えられなくて、急いで家に戻った。この話は誰にも言うまいと思つて、キッチンに立った。

相変わらず、圭一は帰つてこない。最近の彼は、仕事が入ると忙しいせいも、夜中近くになることが多い。瑠子は、一人で食事になる、その時に、二階の賑やかな話声、足音や物がぶつかる音が聞こえると耳をふさぎたくなる。なんで、家族なのに一緒に食事ができないのか、なぜ、同じ家の中にいるのに孫と話してできないのか、と思うと気持ちがまた暗くなる。仕事をしていたころの方がずっと自由で楽しかった、なぜ七十歳近くなるのに、こんな思いをしなければならぬのか、自分なんかの罰が当たったのかと、寂しさだけでなく、胸がふさがる程、生きているのがつらくなる。

夫が急に「引越す」と言つた。前々から検討していた新しい借家、大沢市に引越すことになった。

「なんで」と聞き返すと、なんでじゃないだろう、お前の顔を見てみる、生きた感じがしない、という。

「どうして」と訊き返すと、鏡を見てみると。そんなにひどい顔をしているのかしら？と瑠子は本気になって鏡の前に立った。自分では気づかないが、顔色

がさえないだけでなく、目の下に大きなしわが膨らんでいる。

「なにこれ」と自分の頬に指をあててみた。ぶずぶずと入る。ちよつとの間に皮膚が下がって、垂れている。生気のない顔になった。

ウサギを飼えば、自分の分身のようなウサギにきつと心は慰められるだろう、ネザーランドドワーフが来るまでの一時、我慢をしよう。一人の食事の切なさも、もう一時だ。

ネザーランドドワーフという種類の二歳のウサギを抱いて、瑠子夫婦は引越した。家賃も間取りも見込んだ通りの家で生活できる、瑠子は、元のように元気になった。ただ一つ不便なこととして駅に出るバスが少ない、二時間に一本しかない。不便だと言えば不便だ。

転入した大沢市には、知った人がいないが大家さんの庭先の家なので、近い。声をよく掛けてくれる。彼女と話ができれば、そのうち仲間もできるだろうと、焦らないで待っていた。何分、家の間取りが十七坪で、バリアフリーに造られているので掃除も楽だ。引き戸

も物入れも大きく取ってある。

年齢を気にすることもなく、転居を受け入れて良かった、と思っている。何分平屋は、二階を気にしないで生活できる。ウサギが駆けずり回っても、命名したドットを大声で呼んでも平気。それだけでなく、隣近所は、日中誰もいないので、外にも出せる。家の中だけでなく外を気にしなくて済む、生活を手に入れて、瑠子はホッとした。

室内ウサギと一緒に引越してきたときは、借家生活も初めて、ウサギを飼うのも初めてだから、うまく生活できるかどうかわからなかった。瑠子の経験では、外犬は飼ったことがあるが、家の中で動物を飼うなら、猫だけしか思い浮かばなかった。義母が猫好きで、野良猫にまで餌をやっていたが、いつの間にか家に住み付いていたブチ猫を可愛がるようになった。それも今の家ではなく、建てる前の古い家だった。だからどこをかじられても惜しくなかった。しかし、家を新しくしてからは、いっさい猫を家に上げることもしなかった。動物の飼育に対しては、未経験に近かった瑠子が、寂しいからと言って、突然ウサギを飼うと決心した時には我ながら驚いた。そのぐらい、いやそれだけに、ウサギが愛しく、孫たちに向かっていた気持ち

全部ウサギにつき込んでみても惜しくなかった。

もちろん、えさのやり方、抱き方、運動の仕方、そして、毛の手入れ、入浴回数など手とり足取り飼育係に教わってはきたが、だからと言って抱き上げることもうまくいかなかったので、手を掛け過ぎと注意された。その結果、家まで来て様子を見ると、ウサギの飼いや、専門の指導を受けた。

ドットと命名したオスのウサギは、一・五キロぐらいの体重で、三十センチ長さ、尻尾は小さくて丸くなっている部分だという。前足短く、走るときは、飛んでくる。後ろ足に馬力があつた。

「ドット、オイデ」と呼ぶも彼は、一瞬周りを見なければ、走ってこない。そして、目的の瑠子の膝に載ってくる。その走り方は、耳を羽のように揺らしてピョンピョンと飛ぶ感じだ。だから、数を数えるときに「羽」という単位名を使うのかもしれない。瑠子は、膝の上に伏せさせて、背中をなでる。五センチはよりは長い毛に包まれているので、夏は暑い、という。今のよう十一月であれば、寒いのだろうか、決して猫のように炬燵に潜ってくることはない。陽の入るガラス窓の傍で、前足を立ててじっとしている。ケージに入れられるのが嫌いだから、そのまま、何しろ陽だまりが

好きだ。キッチン隣の洋間にはじゅうたんが敷いてあるので、あつたかい。いつの間にか大きな目をつぶってしまう。瑠子がシンクの傍に行くと、すつとついてくる。お水を飲みたいのかと抱き上げると、瑠子から降りたそうに動く。シンクの中に体を入れると、飲む催促をする。もつと欲しい時には、蛇口に口を付ける。皿に入れた水を飲むよりも蛇口の水の方が飲みやすいようだ。食べる時には顎を下げ、下唇を主にして、上唇は歯をカバーするだけだが、このムニヤムニヤ感がたまらない。いつの間にか小皿の餌を食べてしまう。食べる速さといったらない。いつの間にか飲み込んでしまう。

田舎で飼っていた時のウサギは、いつも葛の葉やほこべを横に啜えてムニヤムニヤ噛んでいた。あの頃の糞は、茶色で草の腐った匂いがしたが、今のインスタントは何の臭いもしない。そしてウサギ特有の二度食いもしない。だから排せつ物の世話は楽だ。尿の量も少なく、決められたアルミの弁当箱の中に布を引くと、そこにしている。便は箱を別にするのでそこには便がつかない。

瑠子が抱き上げても糞の臭いはしない。シャンプーを一日おきにするだけで、寝具の中でもジュータンの

上でも臭いは残っていない。瑤子は手が空いているときはいつも両手で抱いている。外でも同じ、買い物にも連れて行く、ほとんど鳴かないので安心だ。たまに犬や猫に会うと対抗意識が働くのか、ウツウツと威嚇する。きつと飼ってくれる人を独占したいのだろう。

夜は必ず一緒に眠る。ほとんど抱っこ姿勢で、ドットは眠っている。電気毛布のような暑さは嫌うので、肩の辺で瑤子の手枕で眠っている。

瑤子は、ドットと一緒に生活で寂しさを忘れる。ときどき以前の生活、孫、末っ子の有希を思い出すが、こちらからは電話もしない。

野菜を作りに行くときも車に乗せていく。帰りがけの息子の家の門のところに野菜を置いては来るが、最近は、置いたという電話もしない。もちろん頂きますという、菜奈の電話もない。ことによると夫の方に来ているかもしれないが確認もしない。

時々、あの確執、イライラは何だったろうと、思い返すが、あの時の神経の尖りは、もうこりこりだと思っ
ている。もし弱くなった時には病院に来てくれるかもしれないがあの家には二度と戻らないだろう。昔からの家具や寝具、そしてアルバム、書物など納戸にい
っぱい入っているが、もう手にも取りたくないと思っ

ている。



(3)

秋の彼岸、瑤子は、久しぶりに、お墓の掃除と、野菜畑の下見に出かけた。

瑤子は、夫が仕事で使っていた軽トラを運転することにした。これがあれば、元の家の際の畑で野菜作りもできる。そこへウサギと一緒に日向ぼっこもできる。賃貸住宅もいいものだ、ここから野菜畑に通えばいいのだ。そして自家製の野菜で料理する。瑤子は農家生

まれではないのに、野菜作りが好きだ。次は、何を作ろうかなと考えるだけで気持ち安定する。

七月に引越してきてから、野菜畑に、出かけていない。来る前に植えた這いキュウリや秋茄子が、育っていることだろう。ドットも連れていくことにする。

秋晴れの今朝、少し寒いが自分の車に乗ろうとしたとき、ドットが窓から外に向かっとうなっている。何を言おうとしているのか、気になって、家に入った。今までには、後を追うようなことはなかった。

丸い目で、瑠子を見ているが、傍に寄ってこない。すねているのかもしれない。すねることを覚えれば、安心だという。

「ドット、ごめん、畑に行こうかと、エンジン掛けたの」

「独りになってしまふね、抱っこはできないが、助手席に乗ってくれば、畑まで連れて行ける」

ドットに訊いても分からないだろう、一緒にいたいというなら、それしかない、外の空気をドットに吸わせるのもいいかもしれない。瑠子は、さっそく外出用の押し車を出して、運転席の隣の座席に載せた。ドットは、車の座席でケージごと揺れている。その中でおとなしい。これなら、畑に連れていけるだろう、見知

らぬ家に置いてゆくよりもいいかもしれない。ケージにタオルを掛けてみた。おとなしい、いつも瑠子に抱かれるときの様に耳を落としてじっとしている。体は緊張しているかもしれないが、瑠子の動きを見る様子は変わりない。ときどき横になって、じっとしている、車に酔ったのかもしれない。

「ドット、もう少し、我慢してね、寝てもいいから。畑に着いたら走らせてあげる」

畑に行く前に、唐沢家の墓に詣でた。菩提寺で備え付きの花を買って、墓の掃除を丹念にした。圭一の母親の佐和子は、五年間認知症に罹って、自宅療養をした。佐和子の看取りができたことを、瑠子はいつも我慢している。佐和子という名前の通り素直で、いい人であった。瑠子は、義母が好きで、どんなに忙しい日々でも一時間はゆっくり話を聞いてあげた。

ドットとおしゃべりしながら、車は、三か月前まで野菜を作っていた畑に着いた。車は、母屋の庭先にも止められるが、葉菜に嫌味に取られるといけないので、畑の脇に止めた。二十坪もある畑で、いろんな野菜ができる。今日の主役はハウレンソウ、白菜、小松菜、そしてネギだ。ネギは土の盛りがうまくいかず、むき出しで倒れている。今年の秋は、暖かいので、なんで

も伸びるのが早い。サトイモは、大きなはっぱを茂らせている。葉の割に芋は育っていないだろう。夫が暇なときは、昼休みに水を暮れているので、野菜は枯れることがない、やはりどんな野菜でも水くれが一番大事な仕事。夫はそのことを十分承知している。

ケージに入っている、ドットをコンクリートの置き石の上に置いた。瑠子のうごくところへ置いた方が安心していられると思つて、時々、「ドット君」と声を掛ける。彼はチャージングなぱっちり眼で、ずっと瑠子を見つめる。

「空気が新鮮だからいいでしょう。音楽でもかけようか」と、持ってきたラジカセから、ピアノ伴奏の童謡を流す。理解できるのかどうかわからないが、合わすように、「クツ、ク、クツ」と鳴く。

夕方の空はまだ明るい。西にある富士山に太陽は沈むはずだが、まだちっとも降りていかない。これでは陽が落ちる前に帰れそうだと、採った野菜をビニール袋に詰めていると、瑠子の頭が、急にふらつく。四か月前からの引越で、少し疲れているのかもしれない。家にいるときには気付かあったが、時々視野の周りに赤いリングができる。これって何だろうと、追い払うが、消えてゆかない、下を向く仕事ができない。

「ドット君、もう帰ろうか」あまり無理しちゃいけないと、夫に言われている、野菜を採りに来ただけでも労働だ。まして、ドットまで連れてきたから、神経使ったのかもしれない。

いつもなら、採集した野菜の半分は、長男のところにおいてゆくのだが、今回は畑の隅において置こう。家から三分もかからないところにおいてゆけば、葉奈は持つてゆくだろう、かえって声を掛けない方がよさそう。

瑠子はネギ、ホウレンソウ、白菜、そして小松菜を車に積んだ。もちろん、二時間余り付き合ってくれたドットを助手席に乗せることを忘れなかった。彼が、傍にいただけで瑠子は心が落ち着く。いつもなら声を出すこともなく、一人で黙々と働くのとは違う、彼の存在は大きい。愛しいというよりも、もっと温かいものだ。それが自分の手中にあると思うだけで元気が出るし、母屋の孫たちの存在も忘れることができる。

「さ、帰ろう、ゴク로우サマ」とドットに言つて、立ち上がった。夕焼けの富士を眺めようとしたとき、グラツと立ち眩みした。立っていられてなくて、そこにしゃがみたくなったが、しゃがんでしまえば起きられそうもない、早く家に帰つて横になる、それに限ると、

運転席に戻った。とつても胸苦しい、嫌な予感が体の
中で揺れている。

ドットが助手席にいるから、スピードを出すわけに
はいかない。しかし、彼がいるだけでも気が遠くなる
のを防いでくれる。

まだ暗くなる時間ではないのに、次々とライトをつ
けた対抗車が向かってくる。事故を起こさないように、
左寄り車線を最低速度で、慎重にハンドルを握って帰
ってきた。

玄関に入ると、ホツとする。夫は、何時に帰るか
からないから、ともかく、室内を温めて、ベッドに横
になる。一人でいる不安感があつたが、ドットが丸い
目を光らせて傍についてくれるので助かる。手元
に引き寄せて抱いてみた。暖かい豆乳を飲んで、目を
つぶった。少しの時間で眠りに入った。

眠りから覚めたのは、十時過ぎていた。
いつの間にか夫が帰っていた。テーブルでビールを
飲んでいる。

瑠子は、立ち上がろうとしたが、起きられない。そ
れだけでない、ひどく寒い。

「布団、もう一枚かけて、ひどく寒いのに」熱がどんど
ん上がってゆくようだ。

圭一は、妻の様子が、普通でないと考えたのか、「電
気毛布を掛けようか」と言つて、布団を掛けてくれる。

「風邪ひいたのだろう、寝れば治る、こここのところ引
つ越して忙しかつたからな」

こんな時は、夫と二人だけの生活は気楽だ。二階の
心配も、風呂の心配もしなくて済む。夫は、もともと
テーブルに、つまみと、ご飯が炊けていれば、何にも
言わない人だ。二人だけの生活というのは何と気楽な
んだろう、しゃべらなくても生きていける。まして、
瑠子の傍には、ドットがいる。体を温めてくれるし、
話しかければ目をむいて聞いてくれる。返事はないが、
体の調子が悪いと言えば、傍にいて、離れない。

一人だけの借家生活が、どのぐらいリラックスさせ
てくれているか、わからない。具合悪くなつてしみじ
み分かった。大勢の家族と一緒にいるように気を遣う
こともなく、ゆつくり寝ていられる。夫は、仕事に出
かけてしまえば、その事務所が、彼の本拠地。仕事は
ほどほどにあるから、借家の家賃も払ってもらえるし、
現職の時より、ストレスがなくて楽になった。

「明日、医者連れて行こか」と、ビールで機嫌が良
くなった夫は、医者に行くことをすすめてくれた。し
ばらく、医者にも行っていない、どこが悪いというわ

けでもないが、体の動きも悪いような気がする。見てもらった方がいい、かもしれない。

「うん、そうだね、日赤病院に連れて行ってください」「ちゃんと見てもらった方がいい」と、夫も合点がいったのか、明日に診察の予約ができた。

瑠子は、その夜は、牛乳だけ飲んでぐっすり眠った。吐き気も収まったようだ。

診察の結果、瑠子は、前頭葉に出血を起こしていた。手足の障害はないが、言葉をどもるようになった。一言が出てこない、コンニチハと言おうとするが、コ、コ、コと言つて、やつとこんにはいつながらる。次の「いつも……」につなこうとするも、その言葉が出てこない。やつと、出てきた声はいつも使い慣れている。「ドット」が出てくる。

すると、膝の上の載っていた、ドットがびつくりして顔を上げる。自分の言葉に反応するのはウサギだけで、情けないったらない、後は無人の家である。誰を呼んでも答えてくれない。夫は、瑠子の脳の出血が、それほどの後遺症もないので、独りで留守番ができるように、食事の準備をして出かけていく。

瑠子は全く一人になつても家の間取りはバリアフリーになつていたので、手すりにつかまって、トイレの

用を足すことができる。そのまま居間のジュータンに座っていれば、テレビもエアコンも使える。お湯も沸かせる。

「ドット、新聞取ってきてくれる」と頼むと、どこで仕込まれたのか、口に啜えてきてくれる。ゴミが出れば、ごみ箱に入れてくれる。こんなに役に立つとは思わなかった。あるときは物の運搬、ある時は、玄関に人が来た時には、瑠子の伝い歩きを支えてくれる。そしてキッチンに立てば、一緒にシンクの傍で、瑠子をみていてくれる。割りばしやスプーンなら引き出しから、取り出すこともできる。

瑠子は、障害がほとんど残っていないと言つても、動作はかなり遅くなつた。それだけでなく小さいものがつまめない、バランスを大きく崩すと体が揺れる。ドットに、言葉を掛けながら、気持ちを支えてもらう。気持ちのバランスがとつても大切で、その役をドットがしてくれる。ドットは抱かれるだけでなく、支えにもなる。

「ドット、おいで」と言つて抱きしめる。この暖かさで、瑠子は、一人でいる生活を、寂しささえ慰められる。夫の帰りはほぼ八時過ぎになるが、瑠子は、冷蔵庫に入っている幕の内弁当を取り出して食べる。

庭に立てるようになる。主治医は言ってくれるが、今でも留守番はできる。大きな不自由さは運転ができなくなったことだ。それによって、大河町の畑に行けなくなった。畑は、夫が見守ってくれているので、まだ雑草畑になっていないと言う。

しかし、何よりもいいことは、この賃貸住宅に引越してきたことだ。それも障害をおこす四か月前だ。それに伴って、ウサギを飼うことができた、ウサギとの共同生活に慣れると、この十一月に前頭葉の出血という、老人に多い病気にかかってしまった。多くの人は入院するとか、家で寝付く人が多いのに、瑠子はウサギ、ドットの世話で、かなりのことができていく。

動物ショップで聞くと、ドットは、人間の介護の訓練を受けているという。ウサギの暖かい介護で、瑠子は精神的にも、日常生活でもどのぐらい助かってきたかわからない。トイレも独りで行ける。どうしてもできないのは風呂と、散歩、買い物である。これらが介助なしにできるようにするにはリハビリが必要らしい。来年になったら近くのデイサービスからの迎いで、リハビリができるようになる。いま、その手続き中である。

次の日、大家の未知子が見舞いに来てくれた。

「お加減が悪いと聞きましたので、伺いました。脳の内出血でしたか、怖かったですでしょう」

「野菜畑の中において、あれっと思いましたが、すぐに治おさまりましたので、帰ってこられました。ドットがそばにいてくれたので、何となく安心でした」

「無理をしないことです。引越して心労があつたのでしようか、心配事があつたようで、やせられたとか、ご主人が言っていました。私で役に立つことがありましたら、何なりと。この辺のことならなんでも知ってますから、気軽に相談してください」

「よろしくお願いします。これからは自動車を運転しないと決めました。親切なタクシー会社を教えてください」

「それはいいと思います。個人タクシーを紹介します。信用できる人がいますから、安心して呼んでください」

瑠子は、一番心配だった、足の確保ができた。これで、療養生活が楽になると思った。家から二分のところにはスーパーマーケット、コンビニもあるので、生活用品の買い物は便利、自給自足ができる。

この借家に引越してきて本当に良かったと、瑠子は改めて思った。

(二〇二〇・一二・一五)